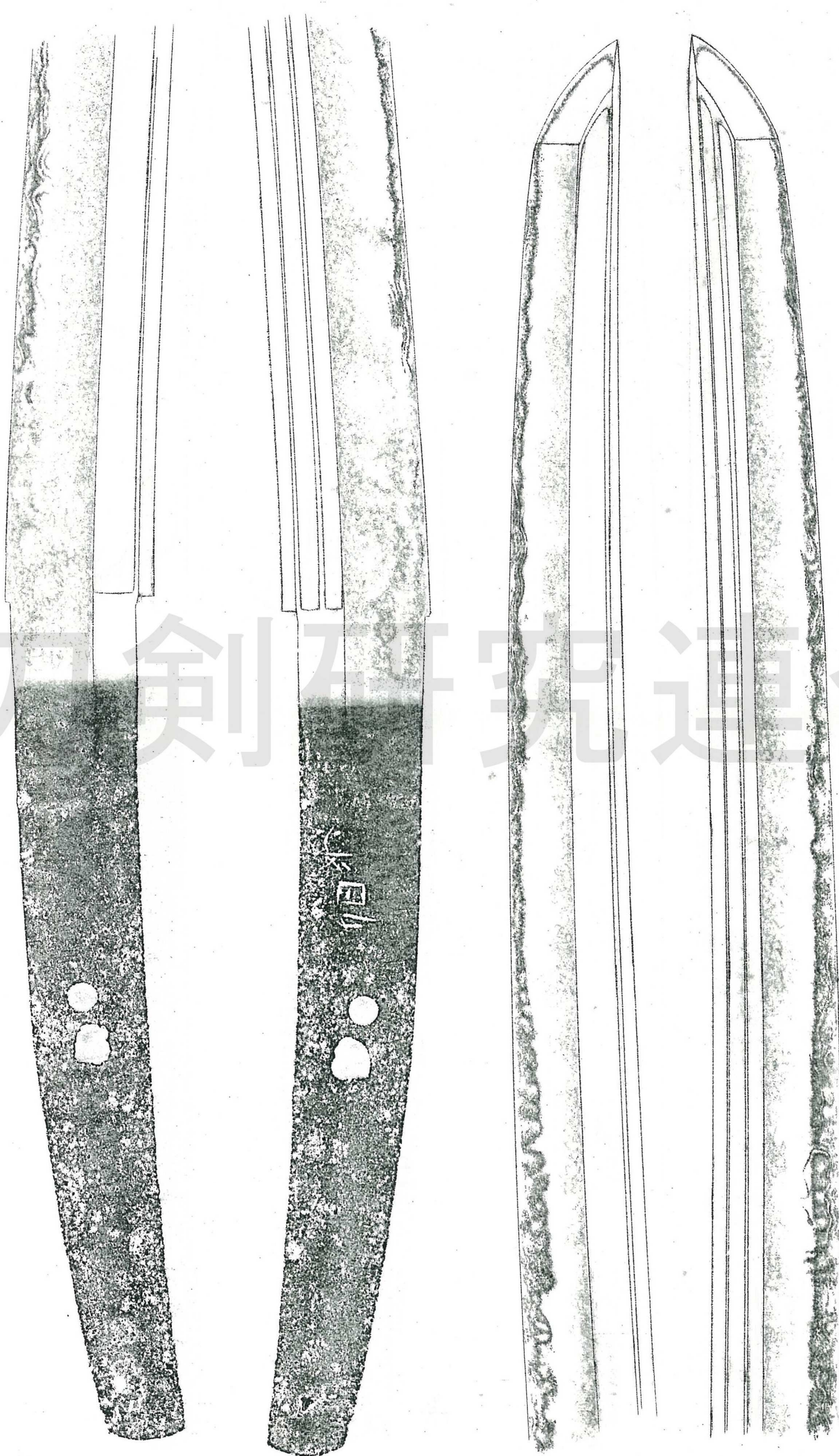


太刀 銘 安綱

平成十四年十二月三日

鎬造、庵棟、先の身巾を狭めて小切先、腰反り高く踏張りが付き、先反りは少なく伏しこころとなる。地鉄は板目大板目と杢目を交じえて微塵の地沸が付き、細かに地景が入り、地斑映りが立つ、地色は黒味がある。刃文は小乱れに小湾水を交じえ焼落しがあり、刃縁はほつれて金筋砂流し、足葉激しく入り刃肌が立つ、沸は厚く処々うるみごころがある。帽子は直ぐに小丸。彫刻は佩表に二筋樋、裏は棒樋。茎は生ぶ、先は刃上り栗尻（先をややつまむ）、刃小丸口。棟小丸口。鑑目は切り、銘は「安」に比べて「綱」の字をやや大きく刃方に寄せて、二字銘を切る。地刃の働きが豊富で出来が優れており、生ぶ在銘、腰反り高く踏張りがあり、小切先に結んだ太刀姿は凜然として見事である。

刃長 74.6cm (三尺四寸六分) 反り 2.56cm (八分四厘) 元中 2.91cm (2.83cm) 先中 1.65cm (1.62cm) 元重 0.57cm (0.54cm) 先重 0.31cm (0.28cm) 茎長 18.5cm 茎元重 0.65cm (0.62cm) 茎先重 0.43cm (0.42cm) 切先長 2.26cm



大 劍 研 究 連 合

因幡 下時作主嶋田出雲守久長

永祿三年六月吉日 (一五六〇)

備前 永祿

「備前長船永光」

「備前国任次郎兵衛尉永光作」

○永光は貞治(一三三三)を始まりとして

○元永(一三五四) 長祿(一四五七)

○永正(一五〇四)五郎次郎

○享祿(一五三八)三郎兵衛尉

○天文(一五三三)六郎次郎 次郎左衛門尉

○永祿(一五五八)次郎兵衛尉

等がある。

刃長 69.3cm (三尺二寸八分七厘)

元重 0.69cm (0.60cm)

茎中 2.81cm (2.80cm)

錫造、庵棟低く、錫中、錫高は尋常、重ねは厚めて身中の尋常な造込みとなり、元中と先中の差は少なく、切先は中切先が延びかげんでフクラはやや枯れる。反りは中向反りが高く、強く先反りを加えた新古境の刀姿となる。

地鉄は小板目に流れた板目で所々歪目を交じえてやや肌立ち、細かな地沸がつく。

刃文は広直刃に角張った互の目と小互の目を交じえ、所々催焼きを焼く、刃中は足・葉よく入り、匂は締って小沸が良くつく。

帽子は乱れて一枚に近く、先は掃けて返る。彫刻は表裏に丸止めの、桶先のやや下がった

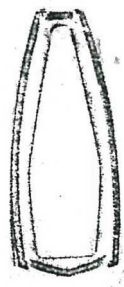
棟角「山」 鑿目は勝手下り、目釘穴は区に近く錫筋にかかりながら、銘は長銘を先にやくにしたがって右に

寄せながら、細整で表裏に切る。元中と先中の差が少なく、反りは高く、切先がやや

延びた新古境独特の力強い刀姿に、板目のやや肌立った地鉄、刃文は広直刃調に角張った互の目、

掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。

掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。



反り 2.92cm (九分六厘)

先重 0.52cm (0.49cm)

茎先中 2.24cm

元中 2.97cm (2.92cm) 先中 2.22cm (2.08cm)

切先長 4.12cm 茎長 17.8cm (18.3cm) 茎反り 0.7cm

茎元重 0.82cm (0.70cm) 茎先重 0.58cm (0.52cm)

元中と先中の差が少なく、反りは高く、切先がやや

延びた新古境独特の力強い刀姿に、板目のやや肌立った地鉄、刃文は広直刃調に角張った互の目、

掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。

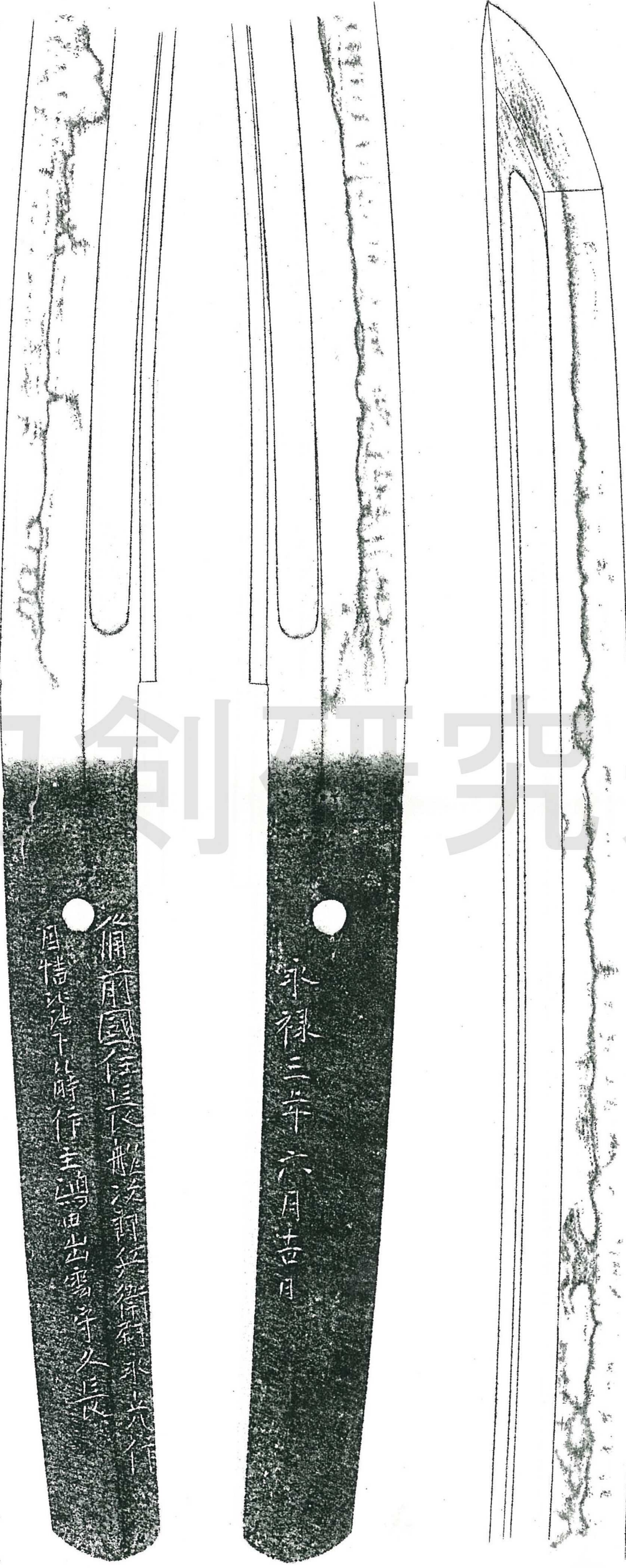
掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。

掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。

掃けて一枚に近い帽子等、未備前としては異風な作でよい資料といえる。

永祿三年六月十五日

備前国任次郎兵衛尉永光作
因幡下時作主嶋田出雲守久長



平成二十七年十一月二十七日

第十二回大会 鑑定刀

永正十一年八月吉日 (二五四)

備前 永正

○勝光は初めに二郎左衛門尉、永正の始め頃より次郎左衛門尉と切る。叔父左京進宗光、与三左衛門尉祐定、子の次郎左衛門尉治光との合作がある。大業物。

○治光、次郎兵衛。

次郎左衛門尉勝光の二男、十郎左衛門尉春光の兄、または親ともいう。

永正六年より享禄五年頃までの作刀を見る。良業物。

刃長 67.6cm (二尺二寸三分三厘)

元重 0.75cm (0.67cm)

茎元中 2.58cm (2.57cm)

鑄造、庵棟尋常、鑄中は狭めで鑄高は尋常、重ねは尋常で身中はやや細めの造込刃となり、元中に比較して先中をやや狭め、切先は中切先でフクラは枯れる。反りは中向反りが高めで先反りを加えた、茎の短かい片手打の姿となる。

地鉄は板目に杢目を交じえて肌立ち、鑄地も同様、地沸は細かく厚くつき、地景は肌につけてよく表わっている。

映りは鑄筋の近くに淡く表われる。

交じり、刃中は足葉よく入り、金筋砂流しを交じえる。匂は深めで明るく冴え、小沸がよくつく。

帽子は直刃、先は尖りかげんの小丸でやや掃け、返りは乱れて長く返る。

短かい茎で、先は刃上り栗尻、刃角小肉、棟 区近くは丸、その下は角、鑄目は勝手下り、目釘元は大きく、銘は親子合作の銘を表に、裏は製作年紀を鑄地に切る。

生ぶ茎・片手打の姿が良く、よく練れた鍛の良、地鉄に、小沸出来の冴えて明るく、直刃を焼く、親子の合作は資料としても貴重。

反り 0.21cm (六分六厘)

先重 0.39cm (0.33cm)

茎先中 2.09cm

元中 2.91cm (2.80cm)

先中 1.74cm (1.66cm)

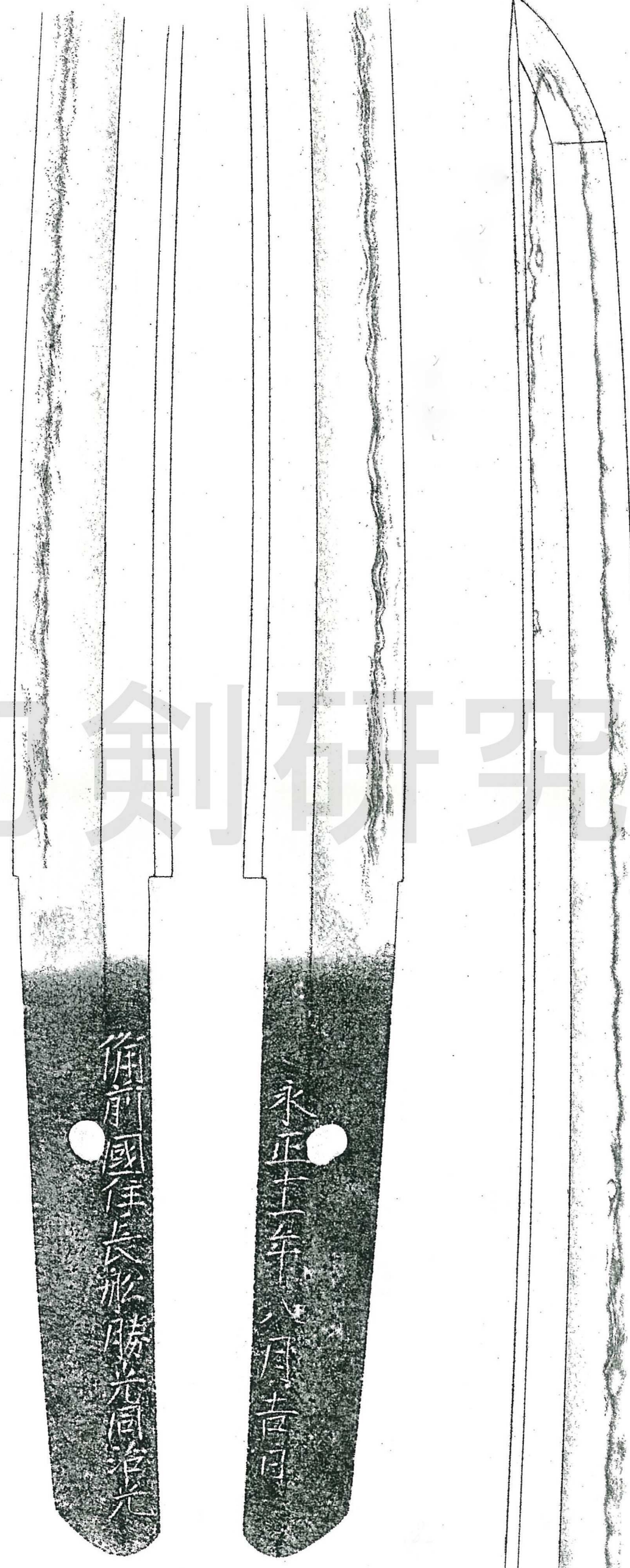
切先長 3.03cm

茎長 13.7cm (13.6cm)

茎元重 0.82cm (0.75cm)

茎先重 0.46cm (0.42cm)

茎反り わずか



備前國住長船勝光同治元

永正十一年八月吉日

心永二十三年十月日(二四二六)

備前 心永

「利光」「備州長船利光」

恒能の子と伝える。

初代利光は俊光門人で貞治と伝える。

二代は初代の子で至徳・嘉慶の作がある。

他に(永享・宝徳)(文明・明応)(永正)

(天文・天正)の利光がいる。

恒能は光弘の子で応安(三三六六)。

本脇差は三代利光で、心永二年から

同二十九年までの作刀がある。

刃長 43.3cm (一尺四寸二分九厘)

茎長 わずか 茎元巾 2.59cm

平造、庵棟尋常、重ねと身中の尋常な造込刃で、フアラは尋常、反りは中間反りにやや先反りを加えた、平造としては

刃長の長めの脇差姿。

添って地景が沈む。映りは棒映りが刃に近く淡く表われ、樋の近く白ケ調の映りが立つ。

刃文は直刃、浅い湾れを交じえ、所々微細な小沸がつく、小足が僅かに入り、匂口は締って明るく冴える。

帽子は直刃、浅く湾れかげんに先は小丸で短かく返る。

茎はおよそ1.5cm程区を送る。太く頑丈な茎で先は刃上り栗尻、刃角小丸、棟角小肉、彫刻は表裏に丸止め、刀樋を掻く。

鑑目は勝手下り、目釘元は二、下の元は銀で埋める。銘は表に作者・裏に年紀を切る。

やや長寸の辻々とした平造の姿と、よく練れた地鉄、締って明るく冴えたい匂口に、淡い棒映り等、利光の一作風を

識るうえでよい資料。

反り 0.8cm (二分)

茎先巾 2.10cm

地鉄は小板目に小圭、板目を交じえてやや肌立ち、細かな地沸が厚くつき、肌

元巾 2.85cm (2.72cm)

元重 0.66cm

元重 0.74cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.66cm

元重 0.74cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.66cm

元重 0.74cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.66cm

元重 0.74cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

元重 0.53cm

